

2025年度
常磐大学 一般選抜 I期
常磐短期大学 一般選抜
入学試験問題

国 語

— 注 意 事 項 —

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。
2. 試験開始の合図のあと、問題冊子および解答用紙のそれぞれに受験番号と氏名を必ず記入してください。
3. この問題冊子の総ページ数は、14 ページです。
4. 問題は、IとIIです。
5. 試験開始の合図のあと、ページ数を確認し、ページが抜けている場合や、印刷が不鮮明な場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
6. 解答は、必ず解答用紙の所定の欄に記入し、解答用紙の余白には何も書かないでください。
7. 問題冊子の余白は適宜利用して構いません。
8. 解答用紙は、原則として交換しませんので、傷めないように注意してください。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

I 次の文章を読み、以下の問に答えなさい。

「まなざし」の起源

1

十代も終わり近く、ジャコメッティの素描^Xに取り憑かれたことがある。宇佐見英治に教えられたのである。人間には生きる根拠が原理的に与えられていないことに気づいて、私は立ち往生したまま数年を過ごすようなことをしていたのだが、そのとき宇佐見先生に出会ってどれほど勇気づけられたか知れない。ここはしかしその仔細を語る場ではない。以下、敬称を省く。

素描は宇佐見宅客間の床の間に飾ってあった。障子^Aを通して射す柔い光線がいまも忘れられない。断るまでもなく複製ではない。ジャコメッティの素描は矢内原伊作をモデルにしたもので、宇佐見と矢内原は親友であり、二人のジャコメッティ論は広く知られている。ジャン・ジュネを描いたものなど、描線が多すぎて煩いが、私が見た矢内原の素描は描線が少なく、描き方が手に取るように分かると思えた。「遠近法を用いているわけではないのに、浮き出て見えるでしょう？」と、宇佐見は、描かれた顔の中心、鼻の先に眼を据えながら、言った。陰影法を用いていないのはもちろんのことである。

確かに浮き出て見える。

私は驚愕し、「①」とした。何が起こっているのか分からなかった。頻繁に何うそのつど、絵を凝視することになった。

いまにして思えば、ジャコメッティは見ることを対象化していたのである。対象を両の眼で見るとはどういうことかを描き尽くそうとしていたのだ。素描のすべてがシンメトリカルであることの理由だ。描線の揺らぎは、両の眼に由来しているのであり、揺らぎは、両の眼が焦点を合わせるその行為そのものを記録している。立体的に見えるということを対象化していると言ってもいい。

言葉にできたわけではない。言語化されないまま、それが、何というか、身体的に会得^Bされてはじめて、私は、リルケが「見ることを学ぶためにパリに来たのだ」とマルテに語らせた意味が分かった、と思った。生きる根拠どころではない、私は、私という現象についておおよそ何も知らないのだ、人間は無限に謙虚にならなければならぬ、と思った。当時、リルケは、そしてロダンも、戦前から戦後にかけてかなり盛んだった流行^Yが下火になり、すでに蔑視され始めていたのである。安部公房^Yのリルケ評価の激変にそれは端的に示されている。リルケとカフカ^Zは近親である。

リルケから出発した安倍^いがリルケを脱ぎ捨てたときカフカが登場するのは当たり前である。安部は衣裳を着替えたわけではない。

「ニュー・ヘブリディーズ諸島の彫刻は、本物、いや本物以上のものだ。あれはまなざしをもっているのだから」というジャコメッティの言葉はこのような文脈に置いて読まなければならない、と私は思う。ジャコメッティは「眼」と「まなざし」を区別している。連続と続く絵画や彫刻の歴史のなかで、「眼」を描くもの、「眼」をかたどるものは少なくないが、「まなざし」を写し取ったものは稀だ、と述べているのだ。

一般的に述べて、肖像画のなかに見返す視線がないわけではない。その延長上にある肖像写真、記念写真の類を思えばすぐに分かるが、むしろ逆に、見返しているもののほうが多いというべきだろう。傲慢な眼もあれば謙虚な眼もある。⑤シ愛に満ちた眼もあれば、⑥コク薄そのものの眼もある。だが、そんなものは性格にすぎない。物語にすぎないのだ。画家も彫刻家も、そして写真家も、多くは物語に引きずられて眼を描き、あるいは眼を撮り、「まなざし」そのものを忘れているのだ。ジャコメッティはそう示唆している。

むろん例外もある。たとえばレオナルド・ダ・ヴィンチ。

『モナ・リザ』の複製が世界に広く流布したのは「まなざし」を描いてしまっているからである。『洗礼者ヨハネ』にしてもそうだ。レオナルドはほとんど始原的に、あえて言えば野蛮に思えるほどに、一方ではイタリア・ルネサンスの仮象を纏いながら、他方では抜かりなく見ることに本質に向き合っている、と思わせる。両眼視がもたらす世界の深さの問題は、『最後の晩餐』に展開された透視図法以上に、『モナ・リザ』の視線によつて提示されているといったほうがいい。見ることは相手に見返されることであり、見返されることは、相手のその視野に包含されていることを知るることなのだ。

②レオナルドのモデルの多くは視線を外している。おそらく、レオナルド自身が凝視する人間だったからである。人間と人間が視線を合わせた瞬間、謎、それも不気味な謎が堰を切ったように流れ出してしまうことを知っていたのである。人間と人間だけではない。人間と動物、人間と植物でさえそうだ。相手の眼をまつすぐに見ることは危険なことなのだ。レオナルドはそう思っていたに違いない。

けれど、『モナ・リザ』と『洗礼者ヨハネ』に関しては、例外的にその眼の焦点を、見るものの眼に合わせてしまっているのである。見るものをはつきりと見つめている。いわば、レオナルドは自分自身の視線、自分自身の「まなざし」を描き込んでしまったのだ。これが『モナ・リザ』が現代にいたつていよいよ頻繁にカラージュそのほかに取り上げられる理由だと思われる。引用される『モナ・リザ』の絵の中心がその眼にあることは疑いない。それは、両の眼のみを切り出して引用し、カラージュする例が少なくないことに【②】としている。見るものは誰でもその「まなざし」が気になるのである。

【③】のことだ。ジャコメッティに倣^かつていえば、謎を流出させない眼など眼ではないのである。見返して凝視する眼は、人に不安を与える。

凝視してくるその眼の未知の視野のなかに、見られている自分が包含されてしまっているという不安を感じさせ、さらには恐怖をさえ覚えさせるからである。自分こそ見られているものなのだ。

いうまでもなく『モナ・リザ』の眼は微笑んでいるだけではない。「あなたのことは知っていますよ」と無言のうちに囁いているのである。あなたの「まなざし」は私の「まなざし」にすでに決定的に包含されている、と。

レオナルドの演出能力——すなわち騙す能力——は見ることに、見られることの始原を提示している。ここには熟考すべき問題——とりわけ神という視野の問題——が潜んでいるのだが、いまは措く。いずれにせよ、「まなざし」という言葉のもとに、ジャコメッティが語ろうとしているのがこの問題であったことは疑いないと、私には思われる。

2

バリはオランダの、ニュー・ヘブリディーズはフランスそしてイギリスの植民地であった。植民地の物産や民俗が万国博覧会に出品紹介される様子については前回すでに述べた。密やかにであれ、現在にまで連綿と続く万国博覧会には^⑤もともと侵略者の被侵略者への贖罪の意味もあつたとはしばしば囁かれることだ。侵略者にも後ろめたさの感覚がないこともなかつたのである。

中国が繰り返し边境の野蛮な国に征服され、逆に野蛮な国を開化して結果的にそのつど自滅させたことはよく知られている。農耕都市文明と遊牧平原文明のあいだに展開されたこの一種の反復そのものを、当時のマグリブを例に挙げて、歴史法則にまで高めたのが十四世紀のイスラムの歴史家イブン・ハルドゥーンであり、そのイブン・ハルドゥーンを先駆的社会学者として称揚したのが二十世紀の人類学者アーネスト・ゲルナーであり、そのゲルナーを評価したのが、今世紀に入つてクリオダイナミクスすなわち歴史変動力学（ヒストリカル・ダイナミクス）を提唱した生物学者ピーター・ターチンである。歴史を数式化して響きを買った『歴史変動力学』が『国家興亡の方程式』の表題のもと邦訳されている。

そのターチンによれば、東南アジア史の大家ヴィクター・リーバーマンの名著『ストレンジ・パラレル』すなわち『奇妙な並行』——ユーラシア西北の国々と東南の国々ということはつまりユーラシア両端の国々の奇妙にして決定的な相似を描いた書——の手柄のひとつは、中国にとつてはヨーロッパもまた边境の野蛮な国のひとつ、現代の視点から見れば、モンゴルや満州に続いて登場した野蛮の一例にすぎなかつたと示唆したところにある——もつとも、この考え方の延長上に立てば中華人民共和国もまたいずれ明朝と似た末路をたどることになるわけだが——。

同じ伝で言えば、「バリはオランダの、ニュー・ヘブリディーズはフランスそしてイギリスの植民地であつた」という、そのバリもニュー・ヘ

ブリディーズも、辺境の野蛮な国のひとつヨーロッパに征服されたにすぎないということになる。下手な理屈であつても、この転倒、東南アジアは文明でヨーロッパこそ野蛮だというこの転倒は、現代人——とりわけ擬似西洋人である日本人——の精神衛生にはきわめて効果があると私は思われる。

文明と野蛮のこの転倒にここで言及するのは、ニュー・ヘブリディーズの彫刻に震撼したジャコメッティは、オセアニア文化の意味深長を「まなざし」という問題で具体的に示していると思えるからである。「まなざし」の意味とその奥行を感じ考えることにおいて、ヨーロッパは東南アジア島嶼部に、いやオセアニアに、決定的に引けを取っているのである。

先に、レオナルドはイタリア・ルネサンスの仮象のもとに『モナ・リザ』や『洗礼者ヨハネ』においてむしろ野蛮なまでに率直に「まなざし」を描いたのだと示唆したのはそういうことだ。レオナルドは五世紀先駆けて事態を転倒させていたといつていい。写真すなわち写真そっくりの描き方などそれこそ表面的なこと、誰でも出来る平凡なことにすぎない。それはたとえば古代中国西安の秦始皇帝陵兵馬俑の夥しい兵士像からも明らかであり、また古代エジプト末期の膨大なミイラ肖像画からも明らかである——それらはそれらでまた別な問題を提起するのだがここでは措く――。

だが、レオナルドの絵は違っている。レオナルドが見るものを震撼させるのは、『モナ・リザ』や『洗礼者ヨハネ』において、人間に本質的な視覚、動物とは違う視覚の誕生の契機と仕組を、鮮烈に捉えているからなのだ。これが謎めいた微笑の意味だ。

見ることは対象に乗り移ること、相手の視野に立つことである。相手の眼で自分を見ることがだ。入れ替わるためには見るものと見られるものを合わせて俯瞰する第三の視点に立たなければならぬわけだが、そんなことはしかし、肉食獣ならば等しく実行していることだ。相手の身にならなければ、獣は追うことも、追われることもできない。俯瞰はその絶対要件と言つていい。

捕食すなわち肉食とともに生じたこの能力を、極限にまで推し進めると言語の要件が整う。文法とは入れ替わる仕組、受動と能動の対象化なのだ。それは第三の眼、俯瞰する眼だけを残して、いまここにいるこの自分というものから立ち去る能力のことである。拙著『孤独の発明』に書いたことなのでこれ以上は触れないが、この俯瞰する眼のいわば自立によつて、人は客観的に自分を見ることができるようになったのである。つまり客観という次元を手に入れたのだ。先祖すなわち死者に乗り移り、未生の子に孫に曾孫に乗り移り、無限遠点——すなわち死——から自分を眺めることができることを客観というのだ。客観とは距離の別名であり、つまり文字と文様の次元である。人は死して名を残すとはそういうことだ。馬鹿々々しいが、名すなわち文字——洞窟画の手形、写真の起源——を残すことの意味、その仕組にはじめて気づいたときの驚愕は眩暈に似ていただろう。⁽³⁾人は永遠に手を触れたのである。観念を実体化したのだ。

自分を客観視できるといふことは、自分自身を家畜化することと別のことではない。自分自身を操作すること、自分自身に規律を課すことだからだ。自覚の別名にすぎないが、人は自分自身を家畜化することによって他の動物をも家畜化することができるようになったのだ。反復が法則として意識され、人は、自分自身を躰け、子を躰け、家畜を躰けることができるようになった。季節の反復を意識するとは、果実の収穫を意識することである。すなわち菜園の手入れとは菜園を躰けることである。稲作農耕などどうでもいい。躰が、管理に、支配に高まったことを示すにすぎないからだ。まず、世界が庭として意識される必要があったと言ふべきである。人は伊達に「エデンの園」などと言つたのではない。庭園は季節とともに花と果実を恵む。逆に言えば、恵むものを庭園というのだ。ホーティカルチャーすなわち人間的意識の始まりである。

こうして人は、死と言語と所有と家畜化を、要するに人間の能力の何もかもをほとんど一挙に手に入れたように見える。まさに発狂したに等しいこの事態のなかで、しかしもつとも重大だったことは、おそらく俯瞰する眼、順次高度を上げて地域全体を眺め、さらに高度を上げてその向うを眺める眼がありうることに、そのスリル、身の毛のよだつような快感を知つたことだろう。人類の出アフリカの起源を言語の獲得と合わせようとする見方に根拠がないわけではない。言語によって惑乱した精神を安定させるためには、遠くまで行く必要があつたに違いないと考えるのは、それこそ人情の【④】である。

俯瞰する眼は、もつと遠くまで行きたい、見知らぬもの——恐ろしいもの——に出会いたい、という欲望の起点、戦争と征服の起点である。俯瞰する眼はまた、犬を友とし、馬を友とする欲望の起点である。人は、犬の身にも、馬の身にもなれたからこそ、彼らを飼育できるようになったのだ。話しかけることができるようになったからこそ、共同作業ができるようになったのだ。

そういう意味では動物行動学者、島泰三の近刊『ヒト、犬に会う』は好著と言ふべきである。島はそこで人類は犬に出会つてはじめて言語を手に入れたと述べているが、私には圧倒的な真実に思える。言語は種を超える出会いによつてはじめて対象化されえたのだ。それがかりに犬と飼い主のあいだだけの言語であつたにせよ、伝達するという仕組みそのものを法則化して教えることができるようになったということである。仲間内では目配せで十分なのだ。島はしかも、最終的にはほとんど問答無用の勢いで、人類が犬に出会つて友となつたのは東南アジア大陸部においてであつたと断言している。南下する犬と北上する人類がそこで出会つたというのだ。ほとんど詩人の直観である。島はさらに犬の家畜化ができてはじめて他の動物の家畜化が可能になり、遊牧もまた可能になつたのだと示唆している。

この直観はしかし、少なくとも私には、当たつていふと思われ。

私はいまも初めてジャカルタ空港に深夜ひとり降り立つたときの感動を忘れないのだが、それは「あ、この空気は以前にも体験したことがある」といふものだった。その数年前にアフリカのナイジェリア、ガーナ、セネガルを訪ねていたのである。緯度のせいか植生のせいか知らない。ただ、

それが異様な懐かしさとして感じられたことは確かだ。むろん、五万年前といまでは環境はまったく違うだろう。だが、緯度は変わりようがない。赤道直下は変わりようがないのである。出アフリカが真実であるとすれば、海岸沿いに東南アジア島嶼部、すなわち当時は水没する以前のスンダ大陸にまでいたったホモサピエンスが、まるで第二の故郷にでも辿り着いたような印象を持ったことは、私には間違いないと思われる。これはおそらく私だけの感覚ではない。

人と犬が慣れるためには共通の故郷と目されるべき場が必要だったのではないか。島はその地が東南アジアだったと述べているのだ。レオナルドが『モナ・リザ』や『洗礼者ヨハネ』に描き込んだ謎めいた微笑の背後に、こういった思索が渦巻いていることは、私には疑いがないと思える。「まなざし」には人類の謎、人類史の謎が秘められているのである。

※1「安倍」は原文の表記のままである。

(出典 三浦雅士「世界史の変容・序説」『アステイオン』91号 CCCメディアハウス 2019年)

問1 波線部A～Eの読みをひらがなで書きなさい。

問2 波線部⑥の「ジ」と同じ漢字を使った熟語を次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

ア ジ久走

イ ジ間

ウ ジ故

エ ジ善

問3 波線部⑦の「コク」と同じ漢字を使った熟語を次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 残コク

イ コク服

ウ コク発

エ コク語

問4 波線部⑤が直接かかっている文節としてもっとも適切なものを次のア～クからひとつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-------|---|--------|---|------|---|-----|
| ア | 侵略者の | イ | 被侵略者への | ウ | 贖罪の | エ | 意味も |
| オ | あつたとは | カ | しばしば | キ | 囁かれる | ク | ことだ |

問5 「①」「②」「③」「④」に入る言葉としてもっとも適切なものを次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | 歴然 | イ | 茫然 | ウ | 必然 | エ | 当然 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|

問6 次の傍線部のうち、二重傍線部Xの「素」と同義で使われているものをア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|-----|---|----|
| ア | 素肌 | イ | 要素 | ウ | 素焼き | エ | 素養 |
|---|----|---|----|---|-----|---|----|

問7 二重傍線部Y・Zの作品を次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|------|---|-----|---|-------|---|-----------|
| ア | 『変身』 | イ | 『峠』 | ウ | 『砂の女』 | エ | 『ドウイノの悲歌』 |
|---|------|---|-----|---|-------|---|-----------|

問8 傍線部(1)について、「まなざし」ととらえているものを次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

- ア 謎を流し失させない眼
- イ 秦始皇帝陵兵馬俑の夥しい兵士像の眼
- ウ 物語に引きずられた眼
- エ 『モナ・リザ』の眼

問9 傍線部(2)について、筆者はその理由をどう考えているか、文中の言葉を使って45字以内で答えなさい。

問10 傍線部(3)はどのような意味か、もつとも適切なものを次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

- ア 文字に書き残すことによって自分の肉体を永遠にこの世にとどめることができるようになったこと
- イ 文字を手に入れたことによって人は死者に乗り移ることができるようになったこと
- ウ 自分の考えを文字化することによって自分の考えが永遠に残る可能性ができたこと
- エ 相手の眼で自分を見ることによって自分の存在が自他ともに永遠になること

問11 傍線部(4)と同様の意味で説明されているものを次のア～エからすべて選び、記号で答えなさい。

- ア いまここにいる自分から立ち去ること
- イ 写真を撮影すること
- ウ 言語を獲得すること
- エ 自分自身を操作すること

問12 本文の内容と合致しているものを次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

- ア ジャコメッティの素描の鼻が浮き出て見えるのは、両の眼で見るということ、また、立体的に見えるというそのことを対象化しているからである。その結果、その人の性格や物語を見事に写し取った肖像画が描いたのである。
- イ ヨーロッパにとつてアジアやオセアニアは野蛮な国々のはずであった。ところが「まなざし」を感じ考えることにおいて、ヨーロッパは引けを取っていた。レオナルドは例外的に「まなざし」を描き、この事態を転倒させていたのである。
- ウ 肉食獣は見るものと見られるものを俯瞰する第三の視点に立つことができる。その能力によって、いまここにいる自分から立ち去り、客観的に自分を見ることができると。そのため肉食獣も子を躡ることができるようになった。
- エ 人間は俯瞰する眼を持つことによつて、遠くまで行きたいという欲望を持つようになった。そして遠くまで行った末に、赤道直下の地で犬と出会った。人間と犬は共通の故郷を持つからこそ、共同作業ができるようになったのである。

II 次の文章を読み、以下の問に答えなさい。

(1) オノマトペには多義語が豊富に見られる。たとえば、「カチカチ」は、「カチカチと氷を叩く」というように硬いものを叩く音を写すことができる。一方で、「この氷はカチカチだ」という文では〈叩いたらカチカチという音が出るくらい硬い〉という触覚義を、「社長は頭がカチカチで困る」では〈融通が利かない〉という意味を、さらに「受験生はカチカチに緊張している」では〈極度に緊張している〉という意味を表す。興味深いことに、「カチカチ」の代わりに「硬い」という形容詞を用いて、「社長は頭が硬い」や「受験生は緊張で硬くなっている」のような言い方も可能である。つまり、「カチカチ」と「硬い」は意味の派生パターンを一部共有しているということである。《A》

物音を表すオノマトペが、その音を出しそうな触覚的特徴をも表すケースは多く、「ザラザラという音」から「ザラザラした手触り」、「パリパリという音」から「パリパリした食感」、「カリツという音」から「カリツとした歯応え」、「カサカサという音」から「カサカサした肌」のように、ほぼパターン化している。《B》

もう一つ例を見てみよう。「ゴロゴロ」というオノマトペは実に多くの意味を持つ。真つ先に思い浮かぶのは「岩がゴロゴロと転がる」のような回転義だろうか。「雷がゴロゴロ鳴る」や「ネコがゴロゴロいう」の「ゴロゴロ」は音を写しているが、多義というよりは、たまたま同じ音連続で写したという同音異義の関係にあるものと思われる。さらに、「ゴロゴロしていないで働け」というと、横になつて怠ける様子が表される。回転義の「ゴロゴロ」からの派生であろう。「この地域にはいい選手がゴロゴロいる」の「ゴロゴロ」はたくさんいることを表す。川辺の石のように転がってきた結果そこにある、という想像に基づいていると考えられ、その意味でやはり回転義をもとにしている。「コンタクトで目がゴロゴロする」という表現も、コンタクトレンズが目の表面であたかも回転しているかのような不快感を引き起こすことをいう。回転義に基づく触覚義と言えよう。《C》

このように、「カチカチ」や「ゴロゴロ」という単一のオノマトペから、無理なく意味の派生が生じ、見事な多義性が実現している。このおかげで、用いるオノマトペの数が少なく済み、経済性へとつながる。それに加えて、「カチカチ」について見たように、同様の意味派生パターンが他のオノマトペや一般語にも確認されることも多い。この特徴もまた、オノマトペはもとより言語一般の経済性に貢献している。

ことばの意味変化は、しばしばミスコミュニケーションを生む。多義性にパターンがあるとはいっても、言語によって、方言によって、世代によつて、意味の広がり方には少なからず差異が生じる。

《D》 X 内における独自の意味の発展には、メンバー同士の絆を深めるような側面もある。

たとえば、若い世代の間で「やばい」が〈とてもよい〉や〈とてもおいしい〉の意味で使われだしてすでにしばらく経つが、使い慣れていない話者にはよい意味なのか悪い意味なのかわからず、^④解釈に当惑するだろう。また、「普通にかわいい」や「普通にいいね」のような言い方に違和感を抱く読者もいるのではなからうか。若者たちは「普通に」を、〈ありうる想定に反して十分に（かわいい・いい）〉のような意味で使っているらしい。

さらに、NHK放送文化研究所の2019年のウェブ記事には、「カレーがほんとに好きで、なんなら毎日食べてます」のような若者ことばに関する調査報告が紹介されている。「なんなら代わりに行きましようか？」のような、何かを提案するときを使う「なんなら」にしか馴染みのない読者には、ただの誤用に思えるかもしれない。若者たちは、どうやら〈さらに言えば〉や〈下手をしようと〉のような **Y** を意図しているらしい。彼らのなかには、伝統的な「提案」の意味を知らない人も多いようだ。

このように、ことばの意味の派生にはある程度のパターンが存在するものの、特定のグループの遊び的な使い方が広がって定着し、結果として前の世代にはつながりが見えないほどの隔たりが生じることもある。そのようなことばは、前の世代にとっては、多義語というよりも同音異義語である。《E》

このような時代の変化に伴う意味の変容はオノマトペにも見られる。「サクツと済ませる」「サクサク仕事をこなす」のような表現は、すでに若者以外にまで浸透している。一方、「毛がワサワサしたイヌ」や「草がワサワサしてきた」という表現は比較的新しいようである。20世紀初頭には、「ワサワサ」は「ソワソワ」に似た落ち着きのなさを表したという。それが今では、落ち着きのなさとはまるで関係のない、毛や草の量を表すことがあるらしい。^②多義というよりも同音異義の例であろう。

言語の十大原則のうち、ここまでに述べた特徴は、オノマトペが言語であるという見方に懐疑的な言語学者でもさほど問題にしないだろう。争点はこれから先の三つの特徴——^③離散性、^③恣意性、^③二重性——である。オノマトペはこれらの原則を満たさないので正式な言語ではない、あるいは言語とは認められても周辺的存在であると考える言語学者が多かった。しかし本当にそうだろうか？

（出典 今井むつみ・秋田喜美『言語の本質』中央公論新社 2023年）

問1 波線部①～⑤の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問2 空欄

X

・

Y

 に入るもつとも適切な言葉を次のア～クからひとつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|---------|---|--------|---|---------|---|--------|
| ア | オーディエンス | イ | ディストピア | ウ | ユートピア | エ | ニュアンス |
| オ | ガバナンス | カ | イデオロギー | キ | ダイバーシティ | ク | コミュニティ |

問3 傍線部(1)について、同じ意味を持つものを次のア～オからひとつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|-----|---|-----|---|----|---|-----|
| ア | 体言止め | イ | 擬音語 | ウ | 倒置法 | エ | 対句 | オ | 助動詞 |
|---|------|---|-----|---|-----|---|----|---|-----|

問4 傍線部(2)について、同音異義が生じる理由を説明したものとしてもつとも適切なものを次のア～エからひとつ選び、記号で答えなさい。

- | | |
|---|---|
| ア | 特定の若者たちの自由な言葉遊びや使い方が定着し、結果として次の世代にも馴染みのない危険な言葉が含まれてしまうから。 |
| イ | 一般のグループの遊びの使い方が広がり、結果としてその世代間のつながりが希薄となり、言葉の格差が生じてしまうから。 |
| ウ | 特定のグループの遊びの使い方が広がって定着し、結果として前の世代にはつながりが見えないほどの隔たりが生じるから。 |
| エ | 一般のグループの実験的な形で若者が自由に言葉を使い始め、結果として前の世代に比べ言葉の使用が乱れ始めてしまうから。 |

問5 傍線部(3)と意味が類似する語句としてもつとも適切なものを次のア～オからひとつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | 意匠 | イ | 克己 | ウ | 突発 | エ | 作為 | オ | 自由 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|

問6 本文中には次の文が抜けている。本文に戻すとすると、どこに入れば良いか。《A》《E》からもっとも適切な箇所を選び、記号で答えなさい。

「硬い」と同様に「カチカチ」もまた言語であることの表れと言えよう。